
取り扱いゴチュウイ!? ~その少女は一触即逝(ゆき)します~

通神?

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

取り扱い「チュウウイ！？」その少女は一触即逝ゆきします

【Zコード】

Z4840Z

【作者名】

通神？

【あらすじ】

ひょんなくじ引きで学級委員長に任命された自称普通な少年
三笠之原龍次は、入学式から一度も来ていない不登校 中島一姫

をクラスの集合写真の為に連れてくるように命じられる。洪々な半面どんな人物かと思いを馳せながら渡された住所に向かい、家のチヤイムを鳴らした龍次が見たものとは……？

『史上最弱のヒロイン』を（勝手に）田指す、ちよつと（ビニールではなく）過激なほのぼのコメディー（とする予定）。

あいつじゃないボーイミーツガール 前編（前書き）

大半の方にとつては初めまして。通神？です。
本当はもう少し先に出でつもりだつたのですが、出来ちゃつたので
書いちやいました（笑）。

ありそうでないボーイミーツガール 前編

握っているのは一本の割り箸。

何の変哲のない、どこにでも売られている市販の割り箸だ。

ただ一つ違う所があるとすれば、

その割り箸の先に、真っ赤な油性マジックで塗られたであらう部分が存在していたというだけだ。

その一本の割り箸が、自称普通の高校生改め 三笠之原龍次みかさのはりゆうじの災難の始まりだった。

「はいっ、このクラスの学級委員長は三笠之原に決定しました～」

「う、嘘……だろ……？」

耳慣れない先生の呑気な声と聞き慣れた自分の驚愕の声音で、クラスメイトが一斉に安堵の溜息を漏らす。お前らの立場が羨ましい限りだよ。

普段なら自分もそこにいるハズなのに 。

「 どこクラスに、学級委員長をくじ引きで決める所があるんだよつ！」

「はい、ここで一つす

そうでしょうね。だつて貴女に向かつて言つたのですから。

因みに独り言に答えてくれた人こそ、我がクラスの担任

いおりま
菴真

子先生。綿菓子のような甘い声音に艶やかな亞麻色の長髪、さらに持ち前の童顔も相成つて十代後半にしか見えないのだが、これでも優秀な大学を出ている立派な社会人……らしい。

「だつて、こうやって決めたらみんな公平でしょ？」

「そ、それはそうかもしねないですけど……」

まるで疑いを知らない無垢な子供のような田でこつちを見る先生。確かにそれは正論のように聞えは良いが、くじ運の善し悪しが存在することを全く考慮に入れてないようにも思えて仕方ない。だがそんなことを言うと、本当の公平なんか存在しないんじゃないかとい

う議論が脳内で展開してしまいそうになるので、ここで止めておくことにする。

『はつはつは、良かつたじゃないか！ 新入生になつて早々学級委員長なんて重役に就いた親友を誇らしく思うぞ、龍次』

「うつさい、イキナリ高笑いすんな！ 魁」

『なぜなら、背後で（・・・）爽やかな笑い声であげる男 城ヶ崎魁があまりにも鬱陶しかつたからだ。整えられた黒髪に時代錯誤なビン底丸眼鏡、暑苦しさを感じさせながらも爽やかさを失わない容姿というアンバランスな外見の持ち主だが、中身は完全に容姿に伴つてゐる。夏に一緒にいなくてはいけないなんて考へると憂鬱になる。』

そもそもコイツと一緒にいなくてはいけないと嘆かなければいけないのは、何を隠そうこの男が 背後靈だからだ。

一か月ほど前にコイツの家族が卒業旅行に出かけたのはいいのだが、その帰り道に飛び出してきた対向車に衝突して皆揃つて事故死。親友の訃報に悲しんでいた所に『まだまだ青春を謳歌しないぞー』とこう爽やかな未練のもと、就職氷河期何のそのと言わんばかりに今月無事背後靈に就職した。

「それに、……俺はまだやるなんて一言も言つて」

『何かもう決まつてゐるみたいだぞ？』

はい？

心中で素つ頓狂な声をあげながら魁が指差した方を振り返ると、菴先生が、まるで当然のように黒板に学級委員長 三笠之原龍次、とでつかい丸文字で書いている光景が田に入つた。

『何やつてるんですか、先生！？』

『ん～？ 何つて、黒板に三笠之原くんの名前を書いただけだよー？』

『だから、そんな大事なものを王様ゲームの使い回しみたいなくじで決めないでくださいよ！』

『使い回しだよー』

……そうだと思いましたとも、ええ。

「だいじょぶ、先生、三笠之原くんのこと信じてるからー。」

「何の根拠のないものを、そんな自信満々に仰られましても……」

まるで某洋菓子店の店主みたいな表情と台詞の前とは裏腹に、自分の意見を曲げる気が全く見えない先生を前に、大きな溜息をつくしかなかった。

学級委員長になつてからの仕事は、予想よりもハードな内容から始まつた。

「不登校？」

「そう、不登校」

入学式（学級委員長への不名誉な就任）から三日、何の予定もなく帰ろうとしていたら先生からお呼び出しがかかり、渋々職員室へ向かつたところで一枚のプリントを渡された。

そのプリントは、住所が書かれた名簿（つい今日貰つた）。しかし、そのプリントにも、真っ赤なマジックでかでかとマークされている部分が存在する。一人の人物を指しているらしい。

中島一姫。

指している人物は、どうやらこの人のようだ。

「中島……」

「そー、中島　さん？　くん？　うーん、どっちが分かんないけどその子」

「何ですかその曖昧な解答」

「えー？　だつて、確かめてないんだもん。今まで一日も来てないから」

綿菓子のようなふわふわした声に合わせて左右に小首を傾げる先生。幼い顔立ちのせいか妙に可愛らしいけど、今はそんなことに思考を割いている暇はないので話を元に戻す。

「それで、この中島つて人がどうしたんですか？」

「この子をね、学校に連れて来て欲しいの」

思考が止まつた。

「…………えつと、どういふことですか？」

しばらくして、先生に詳細を要求して聞いた話をまとめると、

明日から一週間後に、集合写真を撮る予定がある。

この写真是三年後に作られる卒業アルバムに載せる、必須な写真の一つであり、皆で撮る数少ない写真なのだと。う。

本来なら、入学式の次の日（つまり昨日）に全てのクラスを取り終える予定だつたんだけど、例の中島が欠席していたことによってウチのクラスだけ集合写真を撮つてないのだ。どうやら先生が『全員で撮らなきゃ意味がないから』と言つてボイコットしたといふ、写真を撮る人に交渉した結果、今日から8日まで日時を伸ばしてもらつたという。

だがその日までに写真を撮る意向を固めなかつた場合、ウチのクラスだけ集合写真を撮つてもらえないつまり、卒業アルバムの丸々一ページ空白といふことになつてしまつ。

という風になる。

そこまで聞いた途端、頭が痛くなつてきた。

「先生、何してるんですか？」

この人は、妥協案というものの存在を知らないのだろうか？

「だつてえ、先生みんなと写真に映りたいし、それに」

先生はそこで言葉を切ると、遠い目で茜色に染まつた校庭を見ながら。

「たつた一人でも欠けちゃつたら、それはクラスじゃないと先生は思うの」

生徒は公平に扱わないとね、と付け加えてから椅子をこちらに向き直る先生の目は、つい三日前に見たあの目と同じ目をしていた。この先生も、ちゃんと生徒の事を思つてんだなあ……。

「でも何で……俺がやらなきゃいけないんですか？ 先生が行けば

いいじゃないですか」

「ん~。先生、三笠之原くんの学級委員長の実力を見てみたいし」「何だよその『学級委員長の実力』って?」

「それに」

「それに?」

「先生、今日飲み会あるから~」

前言撤回。この人口クに生徒のこと考えてねえ。

「今は飲み会よりも写真の方が優先でしょう。 というか……俺が行くよりも先生が行つた方が簡単だし、それらしい理由だつてあるでしょう」

「でも先生、中島さん家で虐待とか起こつてたら止められる自信がないし……」

「むしろこいつちの方が自信がないですよ!」

「そこは三笠之原くんのみらくるぱわーで」

「ないですよそんな不得体の知れないもの!?」

「便利だねえ~。一家に一台! 三笠之原くん、みたいな?」

「何ですかその物置みたいな宣伝文句!?」

慣れないツツコミのしすぎで思わず息が切れる。この人、おちよくなつてるんじやなからうか?

「じゃあ、そういうことで~。先生時間だから行くね

「あつ、待つて」

そう言つて腕時計を見ながら立ち上がり職員室から去つていく菴女史を、右手をのばしたまま呆然と眺めることしかできなかつた。そりやないよ、先生。

ああ言つ頼まれ方をしたもの、受けてしまつたからには嫌でもやらなければいけないと思つてしまつのは、お人好し故なのか。

『はつはつは、いいじゃないか。頼られてる証拠だぞ』

「うつさい。お前は少し黙つてろ」

夕陽もすっかり暮れ込み、憂鬱な空気とは対照の爽やかな背後靈

に当たる今この頃より空しいことはない。

『でも良かつたじやないか、その中島とやらの住所が俺達の帰り道の途中にあつて』

「まあな……」

魁に言われて、持つてゐる名簿を眺める。確かにこの住所なら帰路のルートから外れないし、馴染みのある場所だから道にも迷う心配もない。

「しかもよく見たら、……俺ん家のすぐ近くじやないか」

『む……？ 確かに言われてみれば』

さりに好都合じやないか！ と爽やかな高笑いをする悪友背後靈と共に足を自宅に向かわせる。

『…………なあ、龍次よ』

「なんだ？』

『この中島とやらの名前は何と読むんだろうな？』

魁に言われてもう一度マークされた所を眺める。

中島一姫。

「…………確かに」

言われてみればそうだ。ぱつと見て何て読めばいいのか分からない。実際、菴先生も分からなかつたみたいだし。

「うーん、……『ひとひめ』かなあ……」

『それだと妙に「口」が悪くないか？』

「じゃあ他の読み方だと……」

『…………『いつき』とか』

「火の玉をジャンピングサーブする人じやないんだから。……むしろガチレズ？』

『そもそも男か女かも分からんには何とも言えんな』

「そうだね』

自分から振つといてとか今のボケはスルーかい、といつ文句を胸の中に押し込めてふと足を止める。

『…………着いたぞ』

そう言つて右を向いた先には、『中島』と書かれた真新しいプリントが貼られた立派な一軒家が確認できる。プリントを内容通りにいくと、ここが『中島一姫』の家だ。

『どうちなんだうな？』

「どっちでもいいよ」

無事に学校に連れ出せれば、な。

「……じゃあ、行くか」

その一声と同時に一般的な灰色の門を開け、中に入る。意外に広い庭はきちんと整備されており、至る所に色とりどりの野菜が栽培されている。園芸が趣味なのかな？

数秒の時間を浪費して門からドアまでの距離を埋め、インターフォンを押す。

お決まりの電子音から数秒後、家から忙しない足音とこの家の主である人物の声が鼓膜に飛び込む。

そしてそれが、自称普通の高校生こと三笠之原龍次の災難の始まりである。

あいつじゃないボーイミーツガール 前編（後書き）

……あまり上手ではないのは重々承知の上です（泣）。
しかも書いたはいいのですが、終わり方を全く考えていません。な
ので色々と問題が起こったり投稿が不規則になることもあるかもし
れませんので、それを承知の上で読んで頂けると嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4840n/>

取り扱いゴチュウイ!? ~その少女は一触即逝（ゆき）します~
2010年10月8日14時30分発行